

大阪と大坂と浪速

写真は『新修 大阪市史』第1巻～9巻である。コロナ禍のもと、大阪市廃止も懸念されるなかで、歴史から学ぶことの大切さを痛感している。標題について、『西六いまむかし』1986年から紹介しておきたい。



大阪はもと大坂と書いたが、坂は「土に反える」からよくないというので、「盛ん」「多し」の意味をもつ「阜」=「こごとへん」の阪と書くようになったことはよく知られているが、さらに古くは「浪速」といった。

「浪速」というのも、「浪華」とも「難波」とも書き、さまざまなか、浪速というのは、神武天皇の東征のとき、このあたりの波の流れが速く、船を進め難かったから浪速といった。浪の花が立ったので浪華といった。それを訛って難波といったと「古事記」や「日本書紀」に書いてある。菜っぱの「な」魚の「な」でその「にわ」、つまり陸の幸、海の幸の豊富な所という意味から、「菜庭」「魚庭」となったという説もある。

また、直越のこの道にして押し照るや難波の海と名づけけらしも

万葉集のこの歌によると、奈良から真っ直ぐに大阪に至る道、古事記に、「日下之直越道」とあるが、その道において西の方を望むと、眼下に一面なにわの海がひろがっていて、日の光が照りつけている、なるほどなにわの海と名づけられたものであるらしいと詠んでいる。「押し照る」は「なにわ」の枕詞になっていて、「なる」は古代朝鮮語で太陽を表わすところから、「なにわ」は「なるにわ」のつづまった形、つまり太陽の庭という意味を持つという説もある。

中国や朝鮮からは日本は日の昇る本になる国であり、日本に渡来して瀬戸内海を東へと向うとき、なにわは太陽の照る庭であり、生駒山の麓、今もある地名の日下が日のぼる本のところと目に映じたのであろう。深江、片江、若江、菱江という名が残っているように、当時は入江が南からのびる上町台地を防波堤のようにして、この東の地方までふところ深く入り込んでいた。

そして、わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよあまの釣舟と百人一首に歌われているように、堂島、福島、四貫島、御幣島、姫島、柴島といった多くの島が点在し、同じく百人一首に、

難波江の葦の仮り寝のひと夜ゆゑ身を尽して恋ひわたるべきとあるように、いたるところ葦が生い茂っていて、西区も中世の末頃までそうした荒地であったと思われる。

(2020年5月13日)